

大門寺所蔵「経石」について

木村 健明

1. はじめに

今回紹介する「経石」（註1）は、茨木市大字大門寺所在の真言宗御室派の大門寺が所蔵するものである。平成26年に大門寺境内に所在する十二社権現の建物直下で確認された石室内から出土した（註2）。

石室は1.2 m×1.2 m（内法1.0 m×1.0 m）、深さ0.95 mを測る四角形の石組施設である。石材には矢穴が認められ、近世中頃以降に構築されたと考えられる。石室の内部からは「経石」の他、18世紀以降の土師器灯明皿、九曜文を表す銅板、寛永通寶、「嘉永七」（1854年）と墨書された木札などが出土している。

2. 「経石」について（註3）

「経石」は長辺約54cm、短辺約30.5cmを測るやや台形を呈する礫の表裏両面に墨書されたものである。記述にあたっては、残存状況が良好で文字の判読が可能な面を表面、煤が付着し、墨書が一部のみ確認できる面を裏面とする。裏面については煤により判読が困難な状態のため、今回の報告は、表面の墨書を主な対象とする。

3. 墨書の内容について

表面の墨書は、中央に描かれた縦25cm、横23cmを測る四角形の内側及び外側に書かれている。枠内中央に五輪塔を四方に展開して描き、塔の各部に東西南北の各方位の種子を書く。このことから、角塔婆を展開した図と考えられる。種子の方位は枠外の方位とも対応する。外側には十二支、枠内に四天王の名が方位に対応して書かれる。なお理由は定かではないが、東が上方になっており、現在の本堂が西側を正面とすることに関係している可能性がある。

枠内に書かれる文言は、仏・明王などの名、十二宮、二十八宿、北斗七星、九曜とそれぞれの種子及び呪句、祈願文、大門寺と六世住持である義門の名前などが書かれている（註4）。

呪句のうち、「若末法世人長誦此真言刀兵不能害／水火不焚漂」の一文は心身や屋内、道場など

を堅固ならしめる「堅」という呪的作法に伴うものである。「迷故三界城悟故十方空本来無東西何處有南北」と「年々大好年月々大好月日々大好日時々大好時」は、地鎮に用いられる呪句である。

仏・明王の尊名は上段中央に一字金輪が書かれ、右上より、金剛愛染明王十七薩三十七尊、如意寶珠、大聖大悲不動明王八大諸大忿怒、如意輪観音菩薩、正観音菩薩、十一面観自在菩薩、善女龍王諸眷属、聖大■歡喜大天鷄羅山中諸大眷属、三寶大荒神諸眷属、宇賀神王、大辨才天十五童子諸眷属、日本朝中大小神祇普天率土権實二類、能満諸願虚空藏大菩薩、護持佛法、金剛界一切諸佛菩薩、摩訶毘盧遮那佛、大師遍照金剛、摩訶毘盧遮那佛、大悲胎藏界一切諸佛菩薩、外道能化地藏大菩薩が認められる。

祈願文は「當山院家 安穩興隆 密教人法繁昌 永代不怠 防除火消 田畑不荒 五穀成就 山内不崩 竹木繁生 樹木長菓 永代不朽 賊難不起 消除厄難 災難消除 恒受快樂 衆人愛敬 息延命 怨悉退散 定業貧轉 福智満足 他方迹類 皆悉消頂 惡事惡若 陰事消除 皆悉消滅 七難即滅 七福即生 村民安穩 家門建續 護持某寺 心中跡願 二成就 多々如意 皆令満足」という文言である。

中央下部には、「日本國攝州嶋下郡五ヶ庄／神峯山大門寺／住持／傳燈大阿闍梨権大僧都／義門太[]」とあり、「天地合」と九字を切る。

枠外の右側には、大門寺境内の範囲を示すと思われる「山林境内 東西四百八拾間／南北貳百拾間／上 貳百四拾間／道川四百九拾間」と、田畑の面積「田畑合四町六反壹畝九九歩」が書かれる。その左側の「南無堅牢地神水自在尊天并眷属皆来守護」とは、地鎮の祭神である。

枠外の左側には、「時享保六龍集／十二月吉月良辰」と年号が記される。以下、大門寺及び義門の名前の書かれる一行、文字が重ねて書かれており判読しがたい一行、「財寶多持壽命長遠富貴自在諸佛愛敬入心礼敬」という文言が書かれる。

更に、内容は不明であるが以上の文言すべてを囲郭するように梵字が書かれている。

裏面の墨書は、左隅に九字が二個、五芒星が一

個確認できる。その右側に文字と梵字が認められるが判読はできない状態である。他の部分では煤が付着しているため、墨書の確認はできていない。

4. まとめ

前節で見てきた墨書の内容から、「経石」は大門寺の六世住持であった義門によって享保六年(1722年)に書かれたことがわかる。

この墨書が何を目的として書かれたものであったのか。枠内には末尾に「祈願文」が書かれ、それ以外の部分に五輪塔、諸仏名、十二宮、二十八宿、北斗七星、九曜が書かれている。祈願文は各種の災難が降りかからず、村民・家門・寺などが長久することを願ったものであり、特定の対象はもたないようである。

枠外には、方角と十二支、大門寺の四至、田畑面積、年号などが書かれている。

なお枠外の方角及び十二支と関連すると思われる図が(水野 1983)に掲載されている。これは、『屋敷地取作法』という書に詳細が記載されている儀式に伴う図であり、土地を7×7の49区画に区切って、その周囲に方位と十二支を書く。この儀式では、堅牢地神に願い、「鎮土法」の呪句を使用するようである。

「経石」の冒頭には、堅牢地神と呪句の双方が認められ、合わせて様々なものを堅固にするという「堅」の呪句も記載されている。このことから、特に地鎮のために書かれたと思われる。

その対象が特定の建物か、大門寺の土地全体であるかは不明である。記録が確認できないので推定に過ぎないが、享保六年に寺内で建物の建立が行われたか、寺地や田畑などに関わる問題が起きたことが考えられるのではないだろうか。

十二社権現の石室に埋められた年代は、「経石」より下位で「嘉永七」と墨書された木札が出土したことから、書かれてから埋められるまではかなりの時期幅があると考えられる。

以上、紙幅の都合上、概要を紹介したにすぎないが、判読できていない文字及び梵字を埋めるとともに、その内容についても改めて考察を加えていくことで、大門寺の歴史の解明につなげていくことができればと思っている。

註

1) 経石と呼称されているが、紹介したとおり書かれているのは経文ではなく、仏の名称や祈願文などである。一字金輪・北斗七星・十二宮・九曜・二十八宿が書かれていることから、「星曼荼羅石」とでも呼称するべきかもしれないが、これが妥当であるか即断できないため、現時点では「」を付けて記述する。

2) 建物の地下に「石室」を設けているものとして、奈良県王寺町達磨寺本堂の石塔埋納遺構(鎌倉時代・王寺町教育委員会 2005)、和歌山県和歌山市海禅院多宝塔の石室(江戸時代・財団法人 和歌山県文化財センター 1998)がある。時期・地域が異なることから、一概に類似性を指摘することはできないが、何らかの「様式」が存在すると思われる。

3) 今年度の文化財資料館テーマ展において初めて展示された。展示解説図録(茨木市立文化財資料館 2015)には、表裏両面の写真が掲載されており、参考にされたい。

4) 十二宮・二十八宿・北斗七星・五芒星などが書かれているため、陰陽道に関わっている可能性がある。茨木市内には陰陽師に関係する集落ないし内部組織である「歴代組」が所在していた(秋山 2002・2006)。大門寺の属する真言宗御室派との関係は定かではなく推測にすぎないが、地鎮に際して何らかの関与があったのかもしれない。

参考文献(五十音順)

- 秋山浩三 2002 「21世紀に遺る陰陽師集団の祭祀 河内額田陰陽道「歴代組」・鎮宅霊符社祭祀次第」『大阪文化財研究』第21号 財団法人 大阪府文化財調査研究センター pp. 35-45
- 秋山浩三 2006 「陰陽道「歴代組」・藤田天社宮文書の現状」『大阪文化財研究』第29号 財団法人 大阪府文化財調査研究センター pp. 21-60
- 茨木市立文化財資料館 2015 『龍王山をめぐる信仰と人々―山岳寺院の軌跡』
- 王寺町教育委員会 2005 『達磨寺発掘調査報告書』
- 株式会社読売新聞大阪本社 2003 『安倍晴明と陰陽道展』
- 児玉義隆 1991 『梵字必携』朱鷺書房
- 財団法人 和歌山県文化財センター 1998 『祈りの考古学』
- 水野正好 1983 「屋敷と家屋の安寧に一そのまじなひ世界」『奈良大学紀要』第12号 奈良大学 pp. 1-12

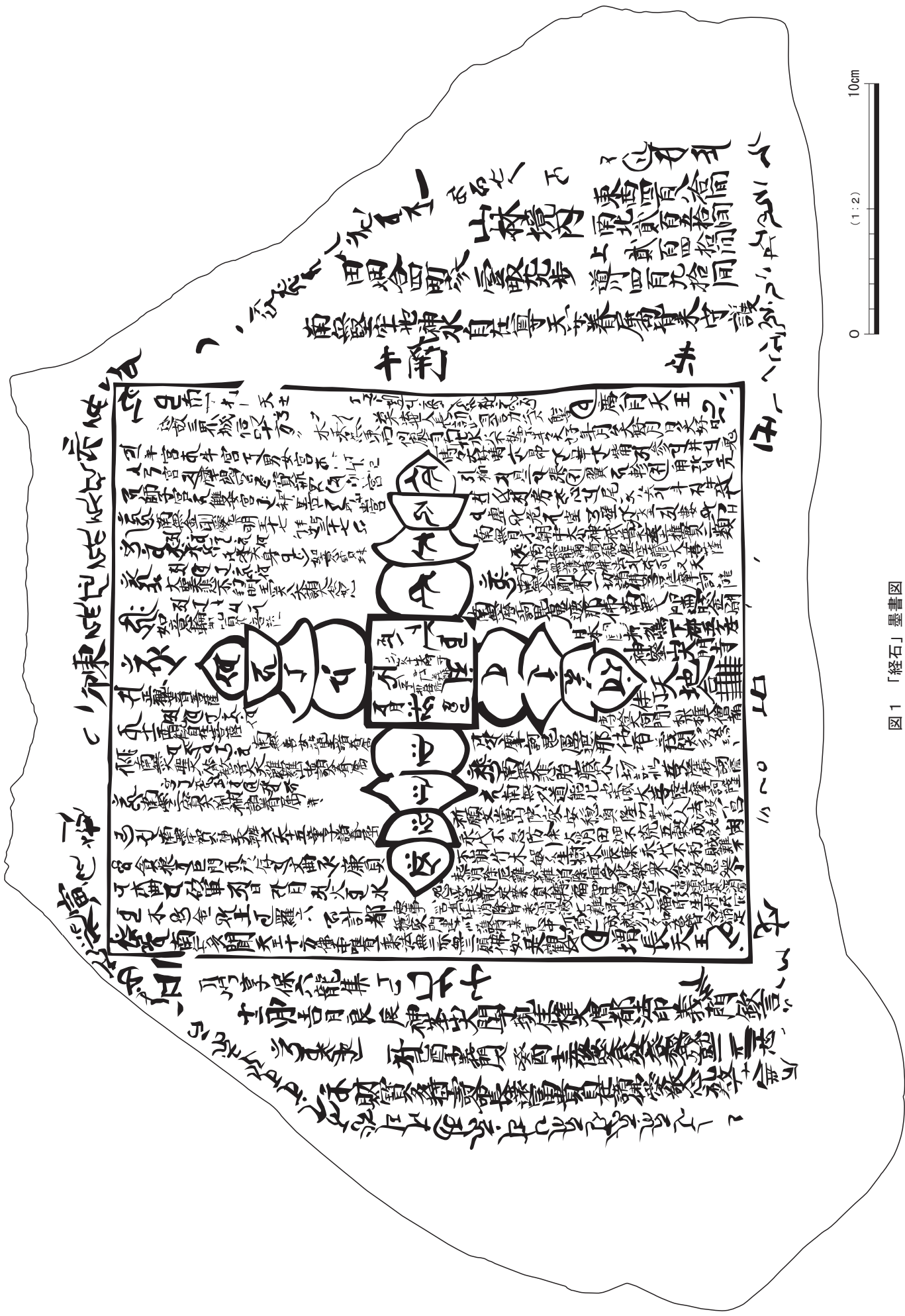


图 1 「經石」墨書圖

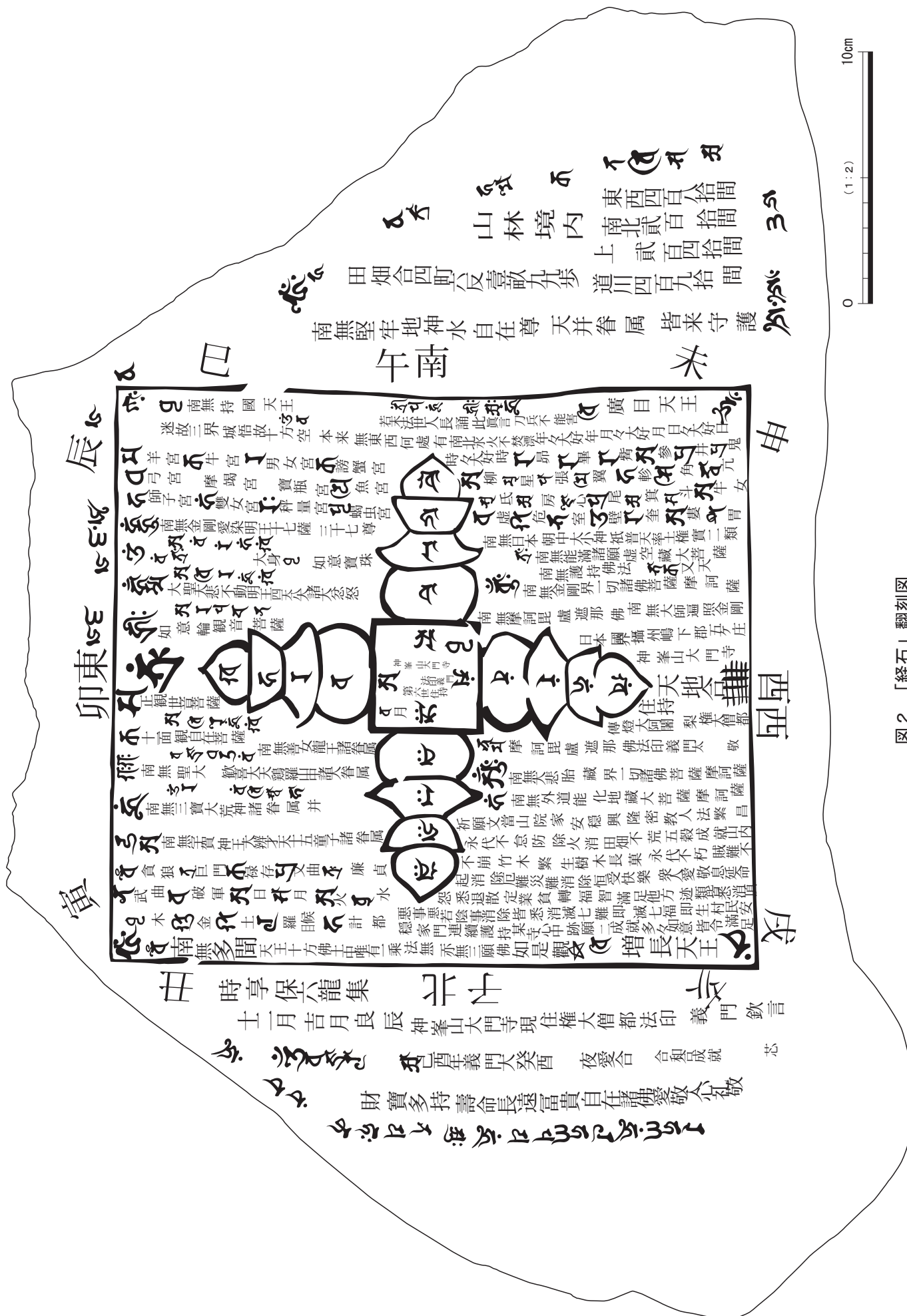


图2 「經石」翻刻图